



小 論 文

試 験 科 目	ペ ー ジ	解 答 用 紙 枚 数	時 間
小 論 文	1～7	1 枚	90 分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は7ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には監督者に申し出ること。
3. あらかじめ届け出た試験科目(英語、小論文の内の1科目)を解答すること。
4. あらかじめ届け出た試験科目と問題冊子が一致しているか確認すること。
5. 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
6. 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
7. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
8. 解答用紙は持ち帰らないこと。

小 論 文

以下の資料は、除本理史・佐無田光著『きみのまちに未来はあるか?』（岩波ジュニア新書、2020年）第5章からの抜粋である。これを読んで、次の設問すべてに答えなさい。

問Ⅰ 資料を400字以内で要約しなさい。

問Ⅱ 近年、災害が各地で増加し、災害に地域としてどう向き合うかが問われている。このことについて、筆者の見解と対比させながら、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

解答は、解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答にあたっては、解答用紙の1マスを1字に使い、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字として扱う。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。

＜資料＞

本書の金沢の事例で見たように、都会では薄れてしまったローカルな要素——人とのふれあい、近隣で協力しあうコミュニティ、余裕のある時間や空間、山や海など自然環境への近さ、風土に根ざした衣食住の慣習、歴史を感じるまちの風景、伝統を醸す職人的なものづくりなど——が再評価され、地域に「価値」を与えています。たとえ新幹線が開通しても、これらが無い金沢では、その効果は長つづきしなかったでしょう。

地域のリノベーションとは、地域固有の自然や景観、伝統、文化、コミュニティなど、暮らしの豊かさを支える「根っこ」の意味を再評価し、地域の資源とすることを意味します。地域住民から見ると、ありふれていて身近な物事かもしれませんが、その歴史的・文化的な意義を知り、新しい面白さを発見することが重要です。全国各地でおこなわれている「地域おこし」や「まちづくり」は、この意味づけ（意味の再評価）によって「地域の価値」をつくらうとする運動だといえます。「地域の価値」が、地域内・外の人の共感をあつめれば、それだけ多くの人が訪れたり、移住したりすることにもつながります。

人びとに真の感動を与えるには、そこに「本物」がなくてはなりません。「根っこ」とは、その地域で人びとが生きてきたことの積み重ねです。歴史や自然や社会と一体になった人びとの知恵の結晶です。過去からの継承こそが価値を高めます。

とはいえ、「根っこ」は地域の人びとにとっては当たり前すぎて、認知されていない場合もあります。第4章で取りあげた能登のケースのように、子どもや孫たちに対して「ここには何も無いから大きくなったら都会に行ったほうがよい」という価値観を刷りこんできたという話は、他の地方でもよく聞きます。

普段は認識されていない「根っこ」の価値をわかりやすく抽出するためには、どうしたらよいでしょうか。それには、能登の「まるやま組」の活動や「金沢らしさとは何か」の議論のように、地元の人や専門家と一緒に地道に学習するプロセスが必要です。「意味づけ」が価値を高める時代になったからこそ、漠然としていた「地域の価値」を言葉にしたり、デザインしたりして、それを共有していく人びとのネットワークが意義をもちます。

金沢の事例でのべたように、観光に利用できるわかりやすいアイコン的な「文化」や「景観」が大事なのではなく、その背後にあるもの、まちの個性や時代の変化にあわせて市民が意識して磨きつづけてきた「都市格」こそが、都市の文化の「根っこ」にあります。もちろん新しい取り組みを排するのではなく、むしろ過去から継承してきたものに対して、現代的に磨きをかけていくことが求められます。それが地域の「根っこ」を育て、豊かにしていくことにもつながるのです。

意味づけこそが価値を生む時代にあっては、地域づくりの担い手は多種多様です。資本金よりも、理解し、共感し、それを表現するといった、広い意味での創造力が問われます。

すでにあるストックを有効活用したり、その辺にある自然空間や生活文化そのものに意味づけをしたりして価値を高める活動は、狭い意味の「経済活動」だけではありません。自分たち自身が楽しみながらやる学習、文化、福祉、スポーツ、ボランティアなどの自発的活動もふくまれます。企業家だけが価値を創り出すのではなく、市民運動家や自治体職員もまた地域の「創造性」の担い手です。

モノづくりの工程に分業があったように、「地域の価値」の生産にも分業があります。「コトづくり」の経済においては、ストーリーの材料（地域資源）となる生活文化が地方にあるだけでなく、それに「意味」を与えて商品化する工程や、それを統括する部門が必要です。ストーリーをつくる、「意味づけ」をする工程を、地域に内発的に作りだせるかどうかが問われてきます。

けれども、「意味」の商品化を担うメディア、広告代理店、デザイン、プロモーション、旅行代理店、情報サービスなどの事業者は、日本の現状では圧倒的に首都圏に集中しています。ディレクションやプロモーションで首都圏の企業と競争して勝てるような企業は、地方都市には決して多くはありません。第3章で見たように、こうした「意味づけ」工程を地域の外に委ねるのではなく、地元でできるようになることをめざして、学習と協働による多様なまちづくりの取り組みが展開されるようになってきています。いちど大都市に出て働いて、こうした専門的スキルを身につけてから、「地域に生きる」選択をする人もいるでしょう。そこで学んで身につけたものを、地域に還元する人材がいることはたいへん重要です。

まちづくり事業で重要なことは、単にイベントを開催して人を呼びこむことではあ

りません。イベントを通じて地域のよさを演出し、文化の創造性を刺激し、広く発信し流通させるためのノウハウを、自分たちで工夫して獲得するところにあります。その過程で、志を同じくする仲間のネットワークが広がり、面白いストーリーづくりに興味をもつ人、さまざまな専門性をもった人材がどんどんあつまってくるようになってくれば、まちづくりは持続的に発展していきます。

観光化の進む時代にあっては、地域の人びとだけでなく、地域を商品化しようとする旅行会社や地域外のメディアなども、地域に「意味」を与えようとしています。場合によっては、それが地域の人びとが求める暮らしとは違うものになっていく可能性もあるので、注意が必要です。

象徴的な話があります。海外の事例ですが、ネパール南部のインド国境近くに、ブッダの生誕地とされるルンビニという地域があります。現在では、地域住民はヒンドゥー教徒が約67%、イスラム教徒が約32%をしめ、仏教徒は1%に満たないのですが、仏教の四大聖地の一つとして観光開発されました。開発計画をつくったのは、日本人建築家・^{たんげ}丹下健三です。寺院区域には世界中の仏教寺院が建立され、あたかも仏教テーマパークの様相を呈して、スリランカやタイなどから多数の観光客が訪れているそうです。地域外の観光客の「まなざし」によって、場所が消費される典型例だといえるでしょう。

観光は地域の人びとにとって、手っとり早い現金獲得の手段にもなります。貧困にあえいでいたり、かつての主要産業が衰退したりして、新しい収入源を欲している地域にとっては、それも必要なことです。しかし、地域の「根っこ」から離れた観光開発では、地域住民の暮らしは置き去りになってしまい、場合によっては「観光公害」と呼ばれるように、観光客が増えることで地域生活がおびやかされるようになる恐れもあります。

したがって、住民をはじめとする地元の主体が、自分たちの暮らしや生業のために何を継承していくかをきちんと考えながら、地域の「意味づけ」をおこなって観光に活かしていく工夫が必要です。観光をサステイナブル（維持可能）なものにしていくためには、地域の「根っこ」を大事にした意味づけの議論を、つねに問題提起していかなければなりません。

地域の意味づけは、地域の歴史に対する解釈をふくみます。しかし、解釈の方向性

をめぐってさまざまな対立や葛藤^{かつとう}があります。それがとくに顕著^{けんちよ}にあらわれるのは、事故や戦争、災害などによって、不幸にして人びとの暮らしが破壊されてしまった地域です。第1章の飯館村^{いいたて}、第2章の水俣市^{みなまた}などがそうしたケースといえるでしょう。

地域をおそった悲劇も、ある面で地域に「価値」を与えます。水俣病事件について見たように、生命の尊厳や人権といった重要な価値を損なう不幸なできごとが、逆説的にそれらの価値の普遍的意義を照らし出しているからです。こうした教訓や、悲劇からの再生のストーリーを直接学びたいという人びとのニーズがあり、これらは近年では「ダークツーリズム」と呼ばれる新たな観光形態として認識されています。

しかし、このような「負のできごと」の意味づけには慎重な検討が必要です。加害一被害関係がある場合、意味づけの仕方にはより一層、注意を払うことが求められます。

水俣市では、「もやい直し」という言葉を通じて、失われた地域の絆を取りもどそうという動きがありました。一般に、災害などの深刻な被害があった地域では、そこからの再生をめざして、災害から復興へ、戦争から平和へ、公害被害から地域再生へと、地域の意味づけを変化させる局面があります。たとえば、原爆が投下された広島市は「平和記念都市」という目標を掲げました。

しかしそのさい、地域住民や被害者の視点をきちんと確保しておかないと、一面的な理解が横行してしまうことになりかねません。「復興」「平和」「再生」といった耳ざわりのいい言葉で語られて、被害の本質や未解決の問題が捨象されてしまうかもしれません。

この点で「もやい直し」は、水俣病問題を地域固有の「価値」ととらえ、まちづくりの前面に押し出すことによって、住民のなかの亀裂^{きれつ}を修復しようとしたのです。もちろん、地域の歴史に対する「意味づけ」（解釈）を一つに収斂^{しゅうれん}させる必要はありません。つらい経験を早く忘れてしまいたいという思いもあれば、そのことを忘れないようにして生きていきたいという思いもあるでしょう。当事者の思いは尊重されるべきです。

大事なのは、過去の悲劇があり、その延長線上に現在の人びとの暮らしがあるという、地域の「根っこ」をきちんと踏まえることです。それを欠いた教訓化や再生のストーリーは本質的な「価値」をもたないでしょう。

東日本大震災と原発事故は、これまでの日本社会のあり方を考えなおすきっかけになりました。ドイツの社会学者、ウルリッヒ・ベックは、現代を「リスク社会」と呼びました。地域の暮らしは、今後もさまざまなリスクに直面することでしょう。第1章で飯舘村の事例を見ましたが、^{あらが}抗えない巨大な力によって、大事に育ててきた地域の「根っこ」が一瞬にして奪われるという事態は、どの地域でもおきないとはいえません。私たちはそうしたリスクに対して、どのように向きあっていけばよいのでしょうか。

21世紀はまちがいなく災害の世紀になりそうです。日本も毎年のように、各地で地震や豪雨、台風被害に見舞われています。

地震学者の多くが、日本列島全体が地震の活動期に入ってきていると認識しており、震度6強以上の地震、火山活動、津波の発生も避けられません。また、気候変動の影響も深刻です。「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)によれば、二酸化炭素排出抑制などの有効な対策がないままだと、21世紀中に気温が平均で3.7℃も上昇すると見られています。もしそうなると、恐るべき気象災害が頻発する時代に入ることでしょう。

加えて序章でも見たように、人口の減少と高齢化が進展しています。日本の90歳以上の人口は、2017年に200万人を超えました。もっとも高齢化のスピードが速いとされる秋田県では、2045年には65歳以上が50%を超え、90歳以上が8.2%に達すると予測されています。要介護や認知症などでサポートを必要とする人が地域の大多数になり、「災害弱者」がそれだけ増えることにもなります。

2011年の東日本大震災以降、「レジリエンス」(回復力)という言葉がよく使われるようになりました。レジリエンスとは、災害などの突発的な変化(ショック)と平常時の困窮や欠乏などの重圧(ストレス)に対して、耐久し、反応し、適応するための能力だと説明されます。リスクをゼロにするのではなく、リスクがあることを受け入れて、それに応じる力を身につけていこうという考え方です。

地域社会にとって、レジリエンスの基本になるのは、コミュニティの自治力です。リスクを軽減し、マイナスの影響を押さえこみ、速やかに対応し復興する地域の力が問われます。高齢化は予測できることですし、災害のハザード情報も精緻化^{せいじゅうか}されてきています。「ありえない」とされることもおきるかもしれないと想像して、地域住民

や自治体が準備をおこない、情報を共有していく必要があります。この点では、やはり普段から地域の価値を共有し、学習と協働を積み重ね、支えあいの経済がある地域ほど力を発揮するでしょう。

不幸にして深刻な被害がおきてしまった場合、悲劇を共有する「共感」の力が大事になります。他者の痛みを分かちあい、支えあっていくことのできる人のつながりを育て、地域を越えた協力関係を構築していくことが求められます。ここでも「地域の価値」が共感の基礎となるでしょう。かけがえのない地域の暮らしがあること、それを共有し、より広く知ってもらふこと、一緒になってつくりあげていくことがますます大事になっているのです。

(出題にあたっては小見出しを省略し、一部漢数字を算用数字に改めた。)

令和3年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 一般入試 後期日程

大学教育をはじめ、高等教育の場であればどこでも、与えられた情報を正確に読み取る読解力、資料を整理し再構築する構成力、そして学んだ知識・経験を踏まえ、形成した自分の主張を自らの言葉で明快かつ簡潔に表現する文章力は、基礎的学力として前提とされる能力の一つである。

本出題は、地元・地域が事故や災害に見舞われながらも持続する可能性や展望について書かれた資料を与え、そこから筆者の論点を的確に読み取り、論点を整理・再構築する力を試す目的で出題した。あわせて、この問題に対する自分の意見をまとめ、正確に、かつわかりやすく、表現する能力があるかを判定したいという意図も、出題した理由の一つである。